

2018年 京都キリスト召団集会だより (抜粋) 目次

2018年1月7日	「わが福音」
2018年1月21日	「人生は神讃美」
2018年1月28日	「生涯、神・キリスト讃美」
2018年2月11日	「神の義、神の愛」
2018年2月18日	「我は福音（キリスト）を誇りとす」
2018年2月25日	「集会を形づくるもの」
2018年3月11日	「後のものを忘れ、前のものに向ひて励み」——集会を形づくるもの
2018年3月18日	「一粒の麦、地に落ちて死なずば」
2018年3月25日	「聖書を身読する」
2018年4月8日	「主および其の恵の御言に」
2018年4月22日	「われ活くれば汝らも活くべければなり」
2018年4月29日	「讃美と祈りの書『詩篇』」
2018年5月6日	「汝、何を求むるか」
2018年5月13日	「キリスト信徒の証しの道」
2018年5月27日	「あなたは私を誰と言うか？」
2018年6月3日	「此の火、すでに燃えたらんには」
2018年6月17日	「『詩篇』はわが魂の故郷」
2018年6月24日	「十字架・聖霊」
2018年7月1日	「讃美と祈りの告白の書『詩篇』」
2018年7月8日	「信仰・愛・希望」——イエス・キリストからのプレゼント
2018年7月22日	「憐憫か犠牲か」
2018年7月29日	「神の護り」
2018年8月5日	「安息日とは」
2018年8月19日	「終末の迫りの中で」
2018年9月2日	「キリスト直結の信」
2018年9月9日	「ガラテヤ書の根本精神」
2018年9月16日	「二つの自由」
2018年9月23日	「御霊の賜う自由」
2018年10月7日	「わが福音」
2018年10月21日	「神の義、神の愛」——ロマ書(1)
2018年10月28日	「律法の行為による義」か「信仰による義」か——ロマ書(2)
2018年11月4日	「偏り見給ふこと無き神」——ロマ書(3)
2018年11月11日	「キリストの贖罪による義」——ロマ書(4)
2018年11月25日	「愛」
2018年12月2日	「信仰による義」とは？——ロマ書(5)
2018年12月16日	「降誕節前後」——輝く老人たち——



わが福音

2018年1月7日

聖書朗読 詩篇33篇

先生は、今年の課題として、集会の一人ひとりが、パウロと同次元の「わが福音」を告白できることを目指して日々の歩みをすることを掲げられました。

私たちが人に福音を伝える時は、単なる聖書の知識ではなく、自分が身をもって体験したことから出る告白だけが人を動かします。

「わが福音」とは、自分がどのような状況下で、どのようにしてキリストに救って頂き、その後もキリストの御護りと御導きの中に在るかという各人の体験を指しています。それは、順境にあつて恵まれた体験よりも、むしろ、パウロが、コリント後書11章23節以下で述べているような患難に遭遇した中で、キリストに一切を全托して助けられたような体験という方が適切です。福音は、この地上の幸福や生命を絶対として約束しているものではありません。地上の運命は、いつ何が起るかわかりません。福音は、この不確かな地上の出来事にとらわれないで、地上の幸不幸を突き抜けた世界に生きるようにと促し、ここにこそ本当のものがあつて示しています。この厳粛な事実、十字架を背負って生まれ、これを貰われたキリストの生き方からも明らかです。

このようなキリストに掴まえられた私たちは、幸いです。たとえば、私たちが不幸を背負って生まれてきたとしても、キリストは、

「私があなたの不幸を全部背負って、あなたの本当の幸いとなつてあげるから、私に全てを委ねなさい。」

と、ご自身の愛と光で全てをプラスにすること、万事を益とすることを約束されました（マタイ福音書5章3節から12節、「山上の垂訓」）。

私たちがキリストを頂いたからには、キリストと同質の生き方をしなければなりません。「主様常に私と一緒にいてください。」という祈りを持って、どんな逆境をも乗り越えて行つてください。そして、救っていただいたからには、自分個人の救いにとどまらずに、外に向かつて福音を伝えてください。ガラテヤ書2章20節の

「我キリストと共に十字架につけられたり。もはや我生くるにあらず、キリスト我が内にありて生くるなり。」

の現実を生き、コリント後書4章7節から18節の現実を一人ひとりが告白してほしいと願っています。これが真の意味での「人生の目的は神讚美にある。」との生き方の実質です。皆様は、様々な体験を通して「わが福音」を確立してほしいと願っています。



人生は神讚美

2018年1月21日

聖書朗読 詩篇34篇

今日朗読した詩篇34篇は神讚美の歌である。前回（1月7日）の集会で朗読した詩篇33篇第1節に「讚美は直き者に適^{ふさ}わしきなり。」とある。奥田先生は、詩篇は讚美の書、祈りの書であり、「小聖書」とも言われており、日頃から詩篇に親しむことを勧められた。次に先生は、85歳となられた今、肉体的な衰えはあるが、その生の自分^{なま}をそのままキリストにお預けし、

「死を滅ぼし、（復活の）生命と朽ちざることとを明らかにしてください（与えてくださった）キリスト」（テモテ後書1・10）

に全托し、人生を神讚美、キリスト讚美で貫きたい、と話された。

先生は、今日の講筵を信仰の先輩、使徒パウロに学ぶことから始められ、パウロ書簡の関連する箇所を次々と引きながら話された。まずエペソ書6章10節以下に目を止め、私たちがこの世の悪の霊と戦うために、神の武具である信仰の盾（十字架）、御霊の剣（御言葉）などで武装する必要があると。次にコリント後書11章、12章を読まれ、パウロが経験した数々の苦難と忍耐に目を向けるとともに、パウロがキリストの使徒たる自覚のもと、キリストのために弱くされたと言っている心も学びたいと語られた。更に先生は、パウロがコリント前書2章で、

「イエス・キリスト及びその十字架に釘^つけられ給いし事のほかは、汝らの中にありて何をも知るまじと心を定めた」

と宣言していること、その

「談話も宣教も、御霊と能力との証明によった」

と言いつつ、十字架のキリストに一切を委ねることに徹した姿に倣いたいと語られた。

最後に先生は、私たち集会員に次のように話された。人は新たな「霊の誕生」をしない限り御霊のことが分からず、この世の人はキリストを受け入れない。しかし、私たちはそれに怯^{ひる}んではならない。キリストの生命をいただいた者は、御霊の子を生み出す使命がある。皆さんは自分を見ず、自分を乗り越え、霊の人としてその使命に力を尽くして欲しい。それは、テモテ前書2章4節にあるとおり、

「神は凡ての人の救はれて、真理を悟るに至らんことを欲し給う」

からであつて、キリストの十字架の贖罪^{あがなひ}を無駄にしないためであると。

以上のとおり今回は、「人生は神讚美である」ことの意義を学び直し、同時に、私たちにも「神讚美の戦士として雄々しくあれ」と出陣を促す内容だった。



生涯、神・キリスト讃美

2018年1月28日

聖書朗読 詩篇103篇

外界の寒さ厳しい京都ではあるが、京都キリスト召団の内にあつては、今日も熱く温かい一日であつた。

今日の講筵は、「信義誠実」という観点から当事者である私たちキリスト者が相手であるイエス・キリストの信頼にそむかず、誠意を持って行動しなければならないという原則を「旧約の福音」ともいわれる詩篇第103篇を通して学ぶものであつた。

私たちは、キリストの十字架の上での贖いを通して私たちの罪が許され、無条件の愛と永遠の命を賜つたという根源現実を思うとき、私たちの人生、生涯は、常に神を讃美している在り方でなくてはならず、まさにこれこそが人間の存在目的であり、信仰の原点なのである。私たち被造物は、生まれながらにして創造主である神を誉め称え、讃美する存在であるが、人間はそれを忘れ、神との間に断絶を起こしてしまう存在となつてしまつたところに人間の重大な罪と誤りがあり、それは祈りと御言葉で以てのみ、その神との関係が修復できるのである。ヨハネによる福音書第20章29節に

「見ずして信する者は、さいわいである」

とあるが、あのトマスでさえもが懷疑論に陥つてしまふ彼の現実を目の当たりにするとき、そこに人間の弱さの限界が見て取れるのである。しかし、御言葉は必ず成就し、約束は必ず実現するという聖書の根源現実の教えを受け取ることが信仰なのである。人間は現象面から証拠や根拠を求めて理解しようとし、見て信じようとする地の次元を這う存在であるが、神・キリストは祈りと御言葉で以て、信じれば見えるという天の次元に立つ存在なのである。見ないで信じるというその根拠こそが私たちに与えられた祈りと御言葉なのである。また、ヨハネの第一の手紙第5章14節に

「祈り願い求めることは、既に聞き入れられて叶えられたり」

とあるが、私たちの次元である現象面では直ちに見えない物が、根源現実の下で私たちの願いはすべて聞き入れられ、それが神の計画に叶つたときに必ず現実的に現れてくるのである。私たちはこの事実を素直に受け入れ、常に感謝しさえすればよいのである。人間世界の現象面ではなく、まずは神の世界の根源現実を祈りと御言葉で以て、それが必ず現象面に現れることを無条件に信じるこそが信仰なのである。

今日の講筵では、多くの兄弟姉妹が鼻を吸り、目を潤ませていたが、まさに奥田先生の言葉を通して聖霊が皆の心に舞い降りた瞬間であつたと確信できる恵みに満ちた一日であつた。



神の義、神の愛

2018年2月11日

聖書朗読 ロマ書5章1～11節

我々は、キリストに生かされて日々を働いて生活しているが、日本人にキリストが受け入れられにくいことは、少なからず集会員誰もが経験していることだと思う。職場においても、クリスマスのイベントは行っても、自分がクリスチャンとして生きていることを伝えると、

「信教の自由は保障するが、クリスチャンであることを公にすることは控えてほしい」

旨を言われたりする。奥田先生は、日本でキリスト道が広まらない理由として、

「日本は恥の文化で、人の判断を基準に生きている」

ことを指摘された。一方、聖書は神の判断を基準にしている。その神の判断（神の義）が日本人は嫌いであるとされた。

日本は仏教の伝統等があり、大慈大悲・愛・赦し等の考えは受け入れやすいが、

「神の義（正しき）に対して、義人はいない、一人もない」

といった聖書の考えは、「何故そんなことを考えなければいけないのか」と拒否されてしまう。しかし、恥の文化（人の判断を基準にする生き方）から永遠の質を持った本当の生命力は生まれるだろうか？我々は、主にある者として、永遠の質を持った本当の生命力を証しし、恥の文化を凌駕する文化（実力）を持たなければいけない。周囲と協調しながらも、周囲の判断に振り回されることなく、本当の生命力をもって世の中で働いていかなければならない。

福音（全キリスト）には、神の義が啓示されている（ロマ書1・17）。

「我を見し者は、神を見しなり」

とキリストは言われた。神の義（天父の御心）を100%満たし得たのはキリストただ一人であった。我々はキリストの中に神を見る。神の義がキリストであれば、神の義とは如何に愛に満ちたものであることか。

生来の人間に、キリストのような生き方は不可能である。何故なら、生来の人間は自分からスタートして自分の完成を目指すからである。キリストだけは、神の御心からスタートして神の御心が地にも成ることを目指す。この点で、人には罪の自覚しか生じないのである。罪の結果は死である。人が罪と死から救われるには、キリストの十字架の贖いと復活・聖霊が絶対に必要だったのである。神の義（正しき）とはそれ程厳粛なものでもあった。



我は福音（キリスト）を誇りとす

2018年2月18日

聖書朗読 詩篇145篇

最近の先生は、ご自身のこの世における限界を意識され、神讃美に貫かれた透徹した深い内容のご講筵を続けておられます。1回でも聞き逃すことのできない真剣勝負のような告白の連続です。今日は、聖書（ロマ書1章16節）にある

「我は福音を恥とせず」

の言葉をさらに超えて、パウロ以上に「我は福音を（キリスト）を誇りとする」生き方を目指して進みたいと語られました。

キリストを誇りとする生き方をするには、キリストが、私（自分）のために、どんなに素晴らしいことをしてくださったかを自覚していることが必要です。生来の自分を苦しめていた「神に逆らう自我」という罪を十字架で葬り去ってくださった上、聖霊を注いで新しい生命を与えてくださった。だから、見える現実がどんな状況であろうとも、それを突き抜けた世界に生きることができる。

「我キリストのうちに、キリスト我がうちに」

との主キリストと一如一体の生き方をさせてくださる。その生き方は、決して安逸なものではなく、険しく艱難の多いこの世にあつて、主キリストから賜わった使命を果たすようにとの、主キリストの本願がかかったものなのです。

この使命を授かった私たちは、本当のキリストを伝えてゆく役割があります。世の人にはキリストが見えませんが、見える私たちがキリストの姿になり、キリストの歩まれたと同じ道を辿らなければ、真の福音を伝えることはできません。神様は、私たち各人のこの世での働きや在り方を通して御業を展開されます。私たちが本当のキリストを世に現わしてゆくには、自分を求めず、他者のために足を洗い、人を利するという己を捨てた生き方をする事です。

私たち一人ひとりが、キリストの御護りと御導きの中にあつていかなる体験をしたか、危機的な状況にあつたときキリストがどのように支えて救ってくださったかを告白してください。キリストによつて死んでも死なない霊的生命を与えられたことを告白してください。福音は、この地上を突き抜けた永遠の世界であることを表明してください。それが、まさに

「我は福音（キリスト）を誇りとする」

という生き方になるのです。引用聖書（エレミヤ書9章22、23節、ガラテヤ書6章8節、コリント前書1章18節、コリント後書5章17節、ペテロ後書3章11節）。



集会を形づくるもの

2018年2月25日

聖書朗読 ヨハネ伝10章1〜18節

今日の講筵は集会を形づくるもの、その求心力は何かを考えるものだった。奥田先生は、個人主義的な考えを貫けば、信仰は各自の心の問題であり、日曜ごとに集まって共に祈ることも、隣人への伝道も必要では無いと言えるが、そうだとすれば、私たちが日曜ごとに集会を持つ意義はどこにあるのか、と話し出された。先生は、この点、福音書では直接答えている箇所は見当たらず、キリストの言葉の中にも明確な発言は無いとされた。その上で、ヨハネ伝10章と17章に目を向けられた。10章では善き羊飼いのキリストが、

「私はこの囲いに入っていない羊をも導く必要がある」

と語っており、羊は羊飼いに導かれ、遂に一つの群れになるとされている。17章ではキリストが、「彼らを守りたまえ」とか「彼らの一つとならん為なり」と祈ってください、心一つにして祈る弟子たちの群れの存在が語られている。更に先生は、マタイ伝18章20節の、

「二三人わが名によりて集る所には、我（キリスト）もその中に在るなり」

の箇所を引かれ、キリストが単独の祈りではなく、共に祈る群れを求めておられると話された。この点はパウロ書簡で一層明確になっており、例えばエペソ書ではパウロが

「御霊の賜う一致を守れ。体は一つ、御霊は一つなり」

とか「神の家族」と述べているとおり、御霊に導かれて心を合わせて祈る集まりの存在が大切であり、伝道者を励まし、伝道の拠点ともなったと考えられる。以上から先生は、まず私たち一人びとりが主様と一対一の関係で結ばれ、真つすぐに立っていること（十字架による新生の自覚）が基本であり、その上で、集う一人びとりが主の御名によつて結ばれ、心を合わせて祈ること、それが、生きた信仰の群れの姿であるとされた。葡萄樹キリストの枝（使徒たち）に連なる「ぶどうの房」が集会であり、やがて、我々自身がキリスト直結の枝となり、豊かに実（房）を結んで行く、と。加えてキリストが、

「我が汝らを愛せしごとく、汝らも相愛すべし」（ヨハネ伝13章34節、35節）

と語られたとおり、群れが愛で結ばれている事が特に大事であるとされた。以上のとおり今日は、集会を形づくるものとして、「一人びとりが十字架を土台としている事」、「御霊の賜う一致」、「互いの愛」の3つを挙げられた。

今日の集会に淡路島からKさんが深い祈りを携え来会された。K姉は終わりの祈りで、自分の思いを超えて主様に出会う参会となったと感謝の祈りをされた。N兄、K姉の証言も深い内容で、いのちも苦難も共にする集会の有難さを感じた。



後のものを忘れ、前のものに向ひて励み

——集会を形づくるもの——

2018年3月11日

聖書朗読 ピリピ書2章1～18節

今日は、「冬来たりなば、春遠からじ」という句の如く、キリストに在つて、辛い時期を耐え抜けば、必ず幸せな時期が来ると確信できる京都キリスト召団の兄弟姉妹の初春の証言でもあつた。今日の講筵本題に入る前に語られたことは、京都の復活節講演会の主題である『「見えるもの」と『「見えないもの』』という観点から私たち京都キリスト召団はキリストと共に歩いている集まりであるということを再認識しながら、人々に証しする者であつて欲しいという願いが込められた導入メッセージであつた。目に見えないもの、目に見えない世界にこそ、永遠に至る最も根源的かつ重要なものである霊的永続的な「命」が宿り、それは肉体的現象的な「生命」とは識別されるものである。これは、コリント人への第二の手紙第4章18節にある

「わたしたちは、見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ。見えるものは一時的であり、見えないものは永遠につづくのである」

という箇所につながるものである。また、「血しおしたたる主のみかしら」と続く讃美歌136番こそがキリスト者としての私たちの原点であり、十字架の上でのイエス様の尊い犠牲の上に私たちの「命」を戴いており、永遠の「命」を生かされているということが理解できる。これこそが「命」の力であり、「命」の源泉なのである。

今日の朗読箇所であるピリピ書と「山べにむかいてわれ目をあぐ」と続く讃美歌301番こそが京都キリスト召団の応援メッセージであり、応援歌であるということを改めて認識し、京都キリスト召団は「キリストのみ、Only you」という思いを持った集団でありたいと説くものである。今日の主題である「後のものを忘れ、前のものに向ひて励み——集会を形づくるもの——」は、ピリピ人への手紙第3章13節にある

「兄弟たちよ。わたしはすでに捕えたとは思っていない。ただこの一事を努めている。すなわち、後ろのものを忘れ、前のものに向かつてからだを伸ばしつつ」

は、キリスト者にとっては非常に大切なことである。パウロに見られるが如く、それがプラスであろうとマイナスであろうと過去の栄光はすべてかなぐり捨て、ただ前に向かってキリストだけに従っていくという姿勢をこの集会では貫いていつて欲しいというのが願いであり、今日の一番に伝えたかったことである。

聖書は我につきて証しするものなり。今日の講筵の言葉を胸に抱き、京都キリスト召団一同が一丸となり、来たる奈良と京都の講演会に臨んでいきたいと思う。



一粒の麦、地に落ちて死なずば

2018年3月18日

聖書朗読 ヨハネ伝12章20～33節

本日の奥田先生は、「一粒の麦、地に落ちて死なずば」と題して、京都キリスト召団の集員のあるべき姿を話された。

「キリストだけに十字架を負わせて、恵みだけを受け取るのではなく、主に倣^{なら}う者として十字架の苦難も共にする生き方を実践しなければならない」

と。

「我々の生き方が主に倣ったものでなければ、聖書についていくら知っていても、本当に聖書を読んでいることにはならない」

と先生は言われる。

パウロや使徒が体験した迫害は、本当のクリスチャンは如何にこの世において厳しい立場に立たされるかを教えている。我々は、本当のクリスチャンとして、地に落ちて死ぬ（主の十字架を担う）生き方を実践する。この世の損得勘定を捨て、ひたすら主の道を歩んでいく。

キリストは

「我に従い来たらんと思う者は、己を捨て、日々己が十字架を負いて我に従え」

と言われた。これが、我々のこの世での生き方である。キリストの生き方を求めて、日々主と共に十字架につけられて生きるならば、キリストはそのような者を決して見捨てない。それどころか、主の聖霊による力を必ず与えてくださる。

キリストはご自身の十字架の死をもつて、死を滅ぼされた。死の恐怖のために一生涯、奴隷の状態にあつた者たちを解放なさるために。（ヘブル書2・14、讃美歌148）

クリスチャンは死が恐怖ではない。この世での生が終わっても、魂はキリストが治められる世界に移るだけである。であれば、この世の内からこの世ならざる永遠の次元の生き方、地に落ちて死ぬ生き方ができるはずである。下手でも、拒まれても、捨て身の姿で人に仕えていくのである。

キリストは、すべてのものを与えた末に、十字架の死の他には何も報われなかった。我々の苦勞の報いは、この世に期待し求めるものではなく、ただキリストの甘美な聖霊による祝福とそれによって結んだ実である。



聖書を身読する

2018年3月25日

聖書朗読 ヨハネ伝6章35～51節

「われは生命のパンなり、我にきたる者は飢えず、我を信する者はいつまでも

渇くことなからん」(ヨハネ福音書6章35節)

イエス様の肉を食べ、その血を飲むということは、キリスト様を自分自身の救い主として受け入れ、キリスト様が私の罪をゆるしてくださったことと、キリスト様のうちにあるとき我々が父なる神様に受け入れて頂いていることを、信受することです。

キリスト様の愛を見つめ、霊言(御言葉)が身につくまで反芻し、これを飲むことによって、イエス様の性質にあずかる者となります。肉体にとって食物がなくてはならないように、魂にとって、キリスト様はなくてはならないものです。食物は、私達がそれを食べて、それが私達の生命の一部となるのでなければ、何の役にも立たない。同様に聖書を身読して、体に染み込ませなければ何の価値もない。キリスト様のいのちが私達のいのちとなるためには、キリストを食べ、キリストをからだに受け入れねばならない。キリストの愛の化身となりましょう。

キリストの御言葉を食べるとき、それが霊であり、いのちであることを感じます。御言葉は、生まれながらの世俗的な質を滅ぼし、イエス・キリスト様のうちにある新しい命を与える。聖霊様は、助け主として魂に降る。人を生まれ変わらせる主様の恵みの力によって、イエス様の御身が、召団員のうちに再現され、私達は、新しい霊止となる。

今日、奥田昌道先生は、聖書の身読道を語られました。

聖書を読む時、どのような読み方をするのか？

「あたまや、心で読むのではなく、からだで読め」

とおっしゃいました。

身体で読むとは、いのちをいただき、自分が聖書の御言葉となること、キリスト自身がロゴスの受肉とられたように、私達ひとりひとりがキリストを現す存在として、

「御霊のキリストが化体した(体を具えた)存在、神の言葉となるように」

と講筵されました。



主および其の恵の御言に

2018年4月8日

聖書朗読 使徒行伝20章17～38節

K兄が、先日開催された奈良の講演会の来会者カードの中から来会者の声を紹介されました。奈良の講演会を楽しみに待っておられるリピーターの方が多いそうです。これは、講演会が継続的に開催され、その都度、来会者にお礼の手紙を出されているという地道な努力が実った結果であろうと思います。京都も大いに見習うべきところがあることを教えられたご証言でした。

奥田先生は、今日のご講筵において、使徒行伝20章17節以下のパウロの別れの言葉と、ヨハネ伝14章から16章までのキリストの「訣別遺訓」を引いて、

「私もいずれ去るときが来ることを念頭において集会をしてほしい。私がいなくても、集会の各人は独り立ちできるか。」

と私たちに対し、これからの集会の在り方を語られるとともに、各人にその自覚を求められました。そのために先ずなすべきこととして、「主および其の恵の御言」に自分の人生の全てを委ね、キリストとともに生きること、キリストと同質の人生を歩むこと、聖歌608番（「イエスはわがいのち」）の3節の生き方をすることを勧められました。

日常の私たちは、病気の問題、家族の問題、仕事の問題など様々なことに束縛されてそこから抜け出すことができず、悩み、もがき苦しんでいます。しかし、主様は、テモテ第2の手紙2章13節にあるように、

「私たちは真実でなくても、キリストは常に真実である」

方なので、どこまでも私たちを背負い、支えてくださいます。あなたの負うべきことは私が背負う、明日のことを思い煩うな、あなたは自分に与えられた使命に打ち込めと力強く励ましておられます。

「今の苦しみは、将来私たちに現されようとする栄光に比べると、言うに足り

ない」（ロマ書8章18節）

ものです。私たちは、

「神様のご計画に従って召された者たちには、万事が益となるように共に働く」

（同28節）

という、神様の遠大なるご計画の中に入れられているから、何を心配することはありません。そして、真に福音の世界に入れられたなら、この世の束縛から逃れる（束縛からの自由）という自分の問題にのみ心を砕くのではなく、それを乗り越えて、キリストのように他者のために尽し、働く（愛への自由）という生き方が求められます。これこそが、ガラテヤ書5章の「キリスト者の自由」なのです。



われ活くれば汝らも活くべければなり

2018年4月22日

聖書朗読 ヨハネ伝14章12〜24節

今日の講筵は、ヨハネ伝福音書の主なテーマである「永遠の生命」に注目し、ヨハネ伝を中心とした御言葉を学ぶものだった。ヨハネ伝20章31節に、この福音書の執筆意図が書かれており、そこには、

「されど此等の事を録ししは、汝等をしてイエスの神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名により（永遠の）生命を得しめんが為なり。」

とある。キリストが「永遠の生命」を持つ方であることはよく分かる。しかし、不完全な私たちに、キリストは、

「私（キリスト）と共に在るならば（主キリストと一つにされているならば）、お前も永遠の生命者だ。」

と言ってくださっている。

「われ活くれば汝らも活くべければなり」

の御言葉は、そのことを明確に述べてくださったものと思う。このキリストの御言葉を「然り」と受け取れないなら、私たちの生命も本当のものとは言えず、その宣教も力が来ない。奥田先生はヨハネ伝から次々と永遠の生命に関する御言葉をたどり始めた。

「人の子もまた必ず挙げらるべし。すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり。それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」（3・15、16）

「御子を信する者は永遠の生命をもち、御子に従わぬ者は生命を見ず」（3・36）

「わが与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水湧きいづべし。」（4・14）

「わが言を聞きて我を遣わし給いし者を信する人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり。」（5・24）

「我は復活なり、生命なり、我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は、永遠に死なざるべし。」（11・25〜26）

「永遠の生命は、唯一の真の神にいます汝と、汝の遣し給いしイエス・キリストを知るにあり。」（17・3）

キリストが私たちに与えると約束してくださった「永遠の生命」を、あなたはどのような受け取っているか。それを真に自分との関わりで恵みとしてありがたく頂いているのか。今日の講筵は、その事を深く問う集会だった。



讃美と祈りの書『詩篇』

2018年4月29日

聖書朗読 詩篇103篇

本日の集会は、「讃美と祈りの書『詩篇』」と題して、当時の人々の祈りと神讃美の様を学び、時代や場所が違っても人間の根源的な飢え渴きや願いは変わらないことを学んだ。奥田先生は、

「キリスト直結で聖書を読まなければ、聖書の言葉に捉われたり、聖書学者の研究に振り回されることになる。」

と話され、御言葉を通して主と繋がり、祈りながら聖書を読む重要性を強調される。

また、先生は、

「聖書の言葉を絶対化する必要はない。書かれた言葉以上のもの考える。なぜなら、聖書の言葉は神が人に書かしたものであり、神の言葉の一かけらに過ぎないから」

と話され、ここでも聖書の言葉に捉われることなく、キリスト直結で聖書を読む重要性を伝えられた。

「いかなる時にも神に信頼せよ。そのみ前にあなたがたの心を注ぎ出せ。神はわれらの避け所である。」(詩編62・8)

「たといわたしを攻める者が多くとも、主はわたしがたたかう戦いからわたしを安らかに救い出されます。主は正しい人(キリスト者)の動かされるのを決してゆるされない。」(詩編55・18、22)

「正しき者(キリスト者)よ、主によつて喜べ、さんびは直き者にふさわしい。(中略)新しい歌を主にむかって歌い、喜びの声をあげて巧みに琴をかきならせ。主のみことばは直く、そのすべてのみわざは真実だからである。主は正義と公平を愛される。地は主のいつくしみで満ちている。」(詩編33・1～5)

「主をおのが神とする国はさいわいである。」(詩編33・12)

：日本が人間を超えた存在に帰依する国になる為に、虚心坦懐に聖書の重要な言葉を教育に用いるようになって欲しい。

集会後は、食事会と総会が行われ、新たに来会された方々から刺激を受け、楽しく過ごすことができた。我々は、一粒の麦が地に落ちて死ぬことで多くの実を結ぶように、自らの殻を打ち破り、新たな出会いを求める必要がある。そうでなければ、自らにも召団にも未来はない。



汝、何を求むるか

2018年5月6日

聖書朗読 ルカ伝11章1節～13節

今日の講筵は、問答から始まりました。

「汝、何を求むるか」（「わが汝に何を為さんことを望むか」）（マルコ伝10・51）

「願はくは御名の崇められん事を。御国の来らん事を（天にある主様の御心が地

上で実現されますように）」（ルカ伝11・2）

我々は、しばしば何かこの世の利益を望んでイエス様を求める。そして自分の願いがかなえられたら、イエス様の愛に信頼しようとする。しかし、救い主は我々が求めるよりも、もっと大きな祝福を与えようと望んでおられます。イエス様は、我々自身の心の悪と、イエス様の恵みの深い必要とを示すために、我々の求めに対する答えを遅らせられる。イエス様は、我々が利己的な動機からイエス様を求めることをやめるように望んでおられます。自分の無力と大きな必要を告白して、我々は、イエス様の愛に自分自身をまったく委ねるのです。すなわち、この身を通して主様の御心が、成っていくように願います。

我々は、主様が願いを聞かれるのを、見たり、感じたりするから信じるではありません。我々は、主様の約束に信頼するのです。信交をもつて主様のみにて行くとき、願い事は、すべて主様の御心にとめられる。主様の祝福を求めたら、それを受けることを信じ、そしてそれを受けたことを感謝します。それから我々は、最も必要な時にその祝福が、実現されることを確信して、自分の義務を尽くすのです。こうする事を悟った時、我々は、求めが答えられる事を知ります。主様は、我々のために、その栄光の富に従い、主様の力強い活動によって、はるかに超えてなしてくださるのです。

光と力のみなもとに密接につながればつながるほど、ますます光が召団を照らし、御心のために一層大きな力が召団のものとなります。召団が、主様と一つ、キリスト様と一つ、天界の家族と一つであることを喜びましょう。



キリスト信徒の証しの道

2018年5月13日

聖書朗読 マルコ伝5章1〜20節

今日は、久々に冷たい風雨が降りしきる京都ではあったが、これにより身も心も洗い流される思いの聖日集会であった。

今日の講筵の主題は、「キリスト信徒の証しの道」であったが、どこからこのような筵題が出て来たのかという問いから始まった。それは、マルコ伝5章にあるように、悪霊につかれてイエスによって癒された人がお供したいと願い出たとき、イエスはそれを許さず、家族のもとに帰り、主がどんなに素晴らしいことをしてくださったのかを述べ伝えなさい、という箇所に着目することからであった。十二使徒のようにイエスが直接選び、伝道に付き従った者もあつたが、このように名もない者が主の恵みを胸に抱き、一人で地方に向いて伝道の使命に突き進むという姿に感動を覚えるものである。聖書を読むとき、私たちもその場面にいるという思いで、自身が直接イエスに出会って主と対話しているというそのようなドラマチックな読み方をする事によって初めて聖書の神髄とイエスの思いを理解できるのである。まさにマルコ伝5章は、この場面を想像させられる箇所である。

私たちにとって大切なのは、自身と主の関係がどこから始まったのかを絶えず忘れないでいることなのである。つまり、主との出会いがどのような契機で始まり、そのとき、主が私たちに何をしてくれたのかを絶えず思い出すことで、救われた喜び、助けて戴いた感謝、そこが出发点となり、これまでの試練や艱難を乗り越えて来られた信仰の原点ともなるのである。誰しもこれを告白することを恐れずに証しすることこそが私たちキリスト者に課された使命でもある。したがって、今までの辛苦は、主に出会うための試練であつたということが自ずと分かり、それが喜びに変わって新しい生命に導かれたということが確信でき、人々に生きいきと証しができるのである。

私たちは、誰でも主に在って新しく創り変えられるという転換の瞬間を感謝として受け取る気持ちが深ければ深いほど、何が起ころうともキリストに対する確固たる信念と信仰を持つことになり、主に対する証しの道を貫いて来られるのである。

キリスト教とはほど遠い日本という国に生まれ、キリスト者として生きることになったその証しを公言すること、これこそが主の御心であり、私たち京都キリスト召団に課された崇高な使命なのである。



あなたは私を誰と言うか？

2018年5月27日

聖書朗読 マルコ伝8章27～38節

本日の集会は、キリストからの

「それでは、あなたは私を何者だと言うのか？」（マルコ伝8・29）

という問いかけに対し、あなたはどうか応えるのか？ というテーマで行われた。世間や人の評価はどうあれ、あなた自身は私（キリスト）をどう見ているのか？ 更に、あなたはどうか生きて行くのか？ と。

キリストと個人的な関係を持つまでは、この答えは出ない。自分で答えを出さずして、本当にキリストに従い切り、主に自らの命を捧げる程の覚悟を持つて生活することは出来ない。主は我々に何をしてくださったか？ 元々、地獄必定の身であった我々に。自分で自分を救う事すら出来なかった我々に。

神の御心が分らず、自己中心・利己主義に陥って、救いなき状況にあるにもかかわらず、なおも愛の光を避けてしまよい続ける人々に対し主は

「私の家に帰っておいで。重荷を降ろして、私の愛の中で魂に安らぎを得なさい。」

罪も咎もあるまま、来て平伏せばいい」

と優しく呼びかけておられる（讃美歌517）。主に救われた我々の成すべき使命は重大である。単に頭で考えた言葉ではなく、生きる姿・仕える姿（体を通した言葉）によって、主の何たるかを伝え続ける使命がある。

33年間の生涯を通して十字架を担い続けた主は、十字架につけると暴徒化した群衆に対し、

「父よ、彼らをお赦しください。自分が何をしているのか知らないのです」

と神に執り成された。このキリストの十字架の事態をあなたはどうか見ているのか？

「主のみ十字架を負わせまつり、われ知らず顔にあるべきかは。十字架を負いにし聖徒たちのみ国によるこぶ幸やいかに。わが身もいさみて十字架を負い、死にいたるまでも仕えまつらん。この世の禍幸^{まがさち}いかにもあれ、さかえのかむりは十字架にあり」（讃美歌331）。

キリストに従う生き方は、キリストを知らない家庭に分裂をもたらす。社会生活でも、世間の考えと食い違うことが起きる。主と共に生きるとは、利己主義の世の中から排斥されることを意味する。その中で我々は主を証しする為に召された。並大抵ではない苦勞を乗り越えるには、キリストの聖霊の火が内に燃えていなければ無理である。その聖霊の火を投ずる為に、主は十字架で命を捨て、復活された（ルカ伝12・49～53）。



此の火、すでに燃えたらんには

——ルカ伝12章49節——

2018年6月3日

聖書朗読 詩篇27篇

私たちの集会で、毎回、最も多く語られ重視されているのは「十字架」及び「聖霊」のことである。今日は、詩篇の学びに入る前に、先ずルカ伝12章の聖霊に関する幾つかの御言葉に目を止め、中でも49節に注目した。キリストは弟子たちに

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。」(ルカ12・49)

と告げられた。福音の火がまだ十分燃えていない様子である。小池先生は、この火を「^{れいか}霊火」と訳され、

「聖霊はキリストが十字架の贖罪死を遂げたあとで復活昇天してから臨む霊であつて、地上のキリストから直接には来ない。このことは極めて大切な真法なのである。」(『聖書は大ドラマである』10月27日)

と述べられている。奥田先生は、キリストに連なる兄弟姉妹が、このキリストの^{ちから}霊火を受けて、「^{よろこび}聖霊の能力」、「聖霊の愛」により、心を合わせ、思うことを一つにしてキリストの喜悅を充たしめ(ピリピ書2・2)、信仰の善き戦闘を戦うよう(テモテ前書6・12)願って、今日のタイトルを選ばれたようだった。続いて詩篇25篇、27篇に進まれた。奥田先生は、最近よく詩篇を取り上げられる。先生は、詩篇を読むと、その祈り、讚美に合わせられて、こちら祈り心にされると語られた。確かに文語の詩篇の聖句の中には、覚えやすい御言葉があり、読む私たちを讚美と祈りへと誘ってくれる。

「なんじの^{あわれみ}憐憫と仁慈とはいにしへより絶えずあり、主よこれを思いだし
給え。」(詩25・6)

「主のもろもろの道は、その契約と證詞とを守るものには仁慈なり真理なり。」

(詩25・10)

「主はわが光わが救いなり、われ誰をか畏れん、主はわが生命の力なり。」(詩
27・1)

「われ主の美しきを仰ぎ、その宮を見んがために、わが世にあらん限りは主の
家に住まんとこそ願うなれ。」(詩27・4)

「(たとえ)わが父母われを棄つるとも、主我を迎え給はん。」(詩27・10)

「主」を「キリスト」と読み替えて、声に出して読みたい。先生は、皆さんが集会に集っていること自体が聖霊にあずかる近道であり、日々、目を覚まして絶えず御言葉に触れていることが大事と話された。



『詩篇』はわが魂の故郷

2018年6月17日

聖書朗読 詩篇73篇

梅雨の晴れ間のすがすがしい聖日に、先生は「詩篇は、わが魂の故郷」と題して詩篇の中から、艱難に遭った時、行き詰まった時に勇気を持って進むための珠玉の言葉を選んで語られました。詩篇73篇では、自分の現状に対する嘆きや人の成功に対する嫉妬と悩みの中で、最後は神様に全てを委ね、讃美と感謝を捧げて立ち上がる力を得ている姿が書かれています。詩篇37篇の、

「主は人の一歩一歩を定め、御旨にかなう道を備えてくださる。その人が倒れても、うち捨てられることはない。主がその手を捉えていてくださる。」

との記述からは、私たちの人生は、自分で選んでいるのではなく、主の御手が導いておられるので、たとえ倒れても立ち上がらせてくださるという強い信頼を学ぶことができます。その他、40篇から42篇、55篇、57篇、91篇には、主を信頼して全てを捧げようとする人には、苦しめる者から解放し主の平安と助けが与えられることが書かれています。いずれも、私たちの人生への指針となり、励ましとなる重要な箇所です。

ところで、詩篇に書かれた慰めや救いを自分のものとして受け取るためには、キリストが自分に何を願っておられるのかという、キリストと自分との関わりをしっかりと確立しておかねばなりません。キリストが自分に良いことをしてくださるから従うのか。そうではないなら、キリストは必要なのか。この根本の問題を曖昧にして、キリストの弟子となることはできません。キリストとともにある人生を生きるためには、この世の価値判断と全く違う原理に従う覚悟がいります。

「キリストの御心に従って歩ませてください、あなたが全てです、という生き方をさせてください、あなたの御心をこの世で実現するためにお使いください」

「自分の身体も、家族も、生死も含めて自分の人生の全てをキリストに捧げます」

という、この世の価値観を捨てた死生の転換を体験しないと本当のクリスチャンにはなれません。キリストが、神様に対し、いつも

「あなたの御心は何ですか」

と祈り求められ、御旨に従って生きられたと同じ次元にいることです。

そうすると、キリストは、私たちの魂をこの地上と絶縁された天国に置いて、平安と慰めを与えてくださるので、地上の出来事に目を奪われることなく、地上の問題を突破し、希望をもって進んでゆくことができるようになるのです。



十字架・聖霊

2018年6月24日

聖書朗読 マタイ伝6章19〜34節

「視よ、これぞ世の罪を除く神の小羊、……これぞ聖霊にてバプテスマを施す者なる」(ヨハネ福音書第1章)

普通は言ったことを繰り返したり、話があちこち飛ぶと、あまり聞こうとしない。しかし、忘れてはならないのは、講筵は理性ではなく霊止^{ひと}の魂にされている。

魂に講筵すれば、死んでいた魂が生き返るのが見える。それが顔にそのまま現れる。集会所に入ってくる時は死んでいた顔だったが、講筵を聞いて帰る時は生きた顔になる。魂が生きれば肉(体)が生き返る。このようなことは、理性を説得してもできない。

先生の講筵は、頭(理性)の中にあるものではなく、腹(エルサレムが地球の臍のように)の中にある。だから、目をつぶっても目を開けても、メッセージが体の中にある。先生の中で入っている御言は、どんな時にも腹の外に出るようになっていく。

原稿がなくても、とめどもなく注ぎ出る。化体(受肉)されているからだろう。

十字架・聖霊の同じ講筵を5分でもできるし、2時間(今日の講筵時間)でもできるし、一日中(夏季特別集会 朝・昼・夕)でもできる。

先生が、このようなことが御出来になるのは、聖霊様が体の中に完全に入って居られる証です。また、十字架で死ぬまで自己犠牲された証です。

これでこそ主イエス様が見える。犠牲のない人には、犠牲が見えない。犠牲を払えば主イエス様が見える。低いところに行けば主イエス様が見える。損をすれば主イエス様が見える。苦難を経験して忍耐している時主イエス様が見える。つまり、先生の講筵は、講壇に立つて語るのも講筵だが、先生の生き方である講筵なので十字架・聖霊が入ってくる。

この世で先生がとても苦難を受けているのを見ました。物凄い攻撃をサタンから受けているのに、いつものように笑いながら講筵をするのを見て、まことの講筵を聞きました。



讃美と祈りの告白の書『詩篇』

——詩篇第55篇～73篇より——

2018年7月1日

聖書朗読 詩篇57篇

今日の集会で奥田先生は本題に入る前にコロサイ書、エペソ書の御言葉を引かれ、私たちの立ち位置を話された。コロサイ書3章のはじめの個所を次のように読まれた。

「あなたはキリストと共に甦えらせられたのだから、上にあるものを求めなさい。

……あなたは十字架によつてこの世に死んだ者であり、その生命はキリストと共に神の中に隠れているが、今や、この世において、栄光のうちに現れる」。

「今は隠れていて「みにくい・アヒルの子」と見えるかも知れない。だが、見える存在の奥にイエス様が新しいあなたを作つてくださっている。それは、古き人として新しい生命に歩むようにしてくださったからである。これは神の次元では既に出来上がっており、これを「ハイ」と受け取つていくのが「信」である」

と。先生は、次にエペソ書1章3節～2章に目を留められた。

「父なる神は私たちを祝し、世の創造の前より私たちを選び、キリスト・イエスに由つてキリストと共に活かし、共に甦えらせ、共に天の所に座らせてくださった」

と。驚くばかりの御言葉であるが、私たちは幼児の^{おさな}ようにこれらの御言葉を信受したい。続いて本題の詩篇に進まれ、今日は55篇から57篇までを味わった。最近の先生は、詩篇に共感され、詩篇から励まされることが多いと話される。詩の言葉が、書かれている意味を超えて私たちの心に迫ってくる。

「汝の荷をエホバ（キリスト）にゆだねよ、さらば汝を支え給わん。義^{ただ}しき人の動かさるることを常にゆるし給うまじ。」（詩55・22）

「我、恐るときは、なんじに依り頼まん。われ神によりて、その聖言^{みことば}を褒めまつらん。われ神に依り頼みたれば恐るることあらじ。」（詩56・3、4）

そして、57篇7節以下では、主にゆだねきつた魂の讃美の歌が高らかに歌われる。

「わが心さだまれり、神よわが心定まれり、われ歌いまつらん^{たた}頌えまつらん。汝の憐れみは大いにして天にまで至り、汝の真実は雲にまで至る。」（詩57・7～10）

私たちも、生涯をかけて、キリスト讃美の人にしていただこう。



信仰・愛・希望

—— イエス・キリストからのプレゼント（テモテ前後書より） ——

2018年7月8日

聖書朗読 テモテ後書1章1～14節

今日の集会は、新聞の人生相談の記事の紹介から始まった。相談者である20代の若い僧侶は、人に対して死に関する説法をしながら、実は自分自身が死を最も恐れているという。死を明らかに見て（諦めて）受け入れ、悟ることがお釈迦様が説かれた仏教であるという。対して、主は死を滅ぼし、福音を通して不滅の命を現わされた（テモテ後1・10）。キリストの本来の生命は十字架で死んで終わるようなものではない。

「体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れるな。畏れるべ

きは、死の後に地獄に投げ込む権威ある方（天の父）である」

と主は言われ、溢れるばかりの生命力をもつてこの世を歩まれた。

キリストが我々の為に死を滅ぼしてくださなければ、人類の誰一人として、永遠の命など得られるはずがない。科学で得られるのは肉体の永遠性のみである。主キリストは、本当の希望や生命力、死んでも死なない、汲めども尽きない泉のような、永遠の靈魂を我々に与えられるのである。

主は、全ての人が救われて真理（本当の事、間違いでない道理）を知ることになることを望んでおられる（テモテ前2・4）。我々は何とくして、同胞にキリストから頂いた希望や生命力を伝える使命がある。その為には、我々が本当にキリストの生命力を頂いて、喜び勇んで主の十字架を担う生き方を実践し、常に新たに生まれ直し、主の有難さを噛みしめ味わっている必要がある。

現代の日本ではクリスチャンに対する迫害がない分、かえって眠ってしまふ。しかし、主に生かされて信心深く生きようとする人は皆、迫害を受ける（テモテ後3・12）とすれば、この世に生きながら、この世と慣れ合いにならずに生きるのは困難・苦難が伴うはずであり、その艱難辛苦を主にあつて突破するだけでも十分目覚めていられるのではないか。

我々は主にあって、折りが良くても悪くても励んで、忍耐強く、この世の人と接しなければならぬ（テモテ後4・2）。人を見て法を説かなければならぬ（コロサイ4・5）。

主は全ての人が救われ、主にある本当の生命力で祝福したいと願っておられる。我々は自分の救いだけでなく、人の為にも主の福音体とならなければ、せつかくの生命も流れが止まった水のように腐ってしまふ。



憐憫か犠牲か

——マルコ伝を読む（第1回）——

2018年7月22日

聖書朗読 マルコ伝1章1〜28節

今回からマルコ伝の講筵が始まりました。最初に、マルコ伝は、キリストの足跡を簡潔に記載しているので、全体を把握しやすい、さらに深い内容はマタイ伝、ルカ伝により補うという、聖書の読み方の秘訣を教えてくださいました。

先生が目されたのは、2章13節から17節の末尾のイエスの言葉…

「健かなる者は医者を要せず、ただ病ある者これを要す。我は正しき者を招かんとあらで、罪人を招かんとて来れり」

でした。この箇所はマタイ伝では、

「なんじら往きて学べ『われ憐憫を好みて、犠牲を好まず』とは如何なる意ぞ」とのイエスの言葉が挿入されています（9章13節）。

ユダヤの律法では、様々な機会に「犠牲（動物を屠つて）」を捧げることが求められました。その顕著なものが、「律法」違反の行為に対して、その代償として捧げる「犠牲」でした。「憐憫」は「犠牲」とは反対に「赦し、憐れみ、愛」を意味します。イエスは、神の求め給うのは「犠牲」ではなく、「赦し、憐れみ、愛」であると説かれ、かつ、自らはご自身を「犠牲」としてわれわれの「罪」の代償として捧げてくださいました。そして、イエスが求められたのは、助けを必要としている隣人を思いやる、その重荷や苦しみを共に担おうとする憐れみの心、愛の精神です。生まれながらの人間は、このような心根になることはできません。主イエスは、人が律法を遵守しそれを誇りとする生き方から、神の憐憫により神の愛の中で生きる生き方に変わるように、自らが生贄となつて十字架に架かられました。このイエスを砕けの魂で受け取るか否か、ガラテヤ書2章20節を自らの現実として受け取るか否かが、真のクリスチャンであるための試金石です。

福音は、終末（神の審判の到来）が近いとの自覚の下で告知されました。このことを自覚して、いつ終末が来てもよいような生き方をするのが求められます。私たちは、主様に全托して、「何があろうとも、あなたと共にあるのが私の人生です。」

と主様を讃えながら、どのような場に置かれようとも、そこで福音の花を咲かせることが求められます。これは、キリストの霊が宿れば必ず実現するのです。



神の護り

2018年7月29日

聖書朗読 詩篇46篇

「神はわれらの避所さげどころまた力なり、なやめるときさげどころの最ちかき助けなり」(詩篇46篇)「この世で試みの嵐の最中にあつてなやめるとき、助けを頂く秘訣は、主様のふところところに逃げ込んで、同時に力をいただいて、また世に出て行く事です」

と先生はおっしゃいました。

イエス様は、従うようにとわれわれを召しておいて、その後でわれわれを捨てるようなことをなさらない。イエス様はこう言われる、

「恐れるな、わたしはあなたをあがなつた。わたしはあなたの名を呼んだ、あなたはわたしのものだ。あなたが水の中を過ぎるとき、わたしはあなたと共にいる。川の中を過ぎるとき、水はあなたの上にあふれることがない。あなたが火の中を行くとき、焼かれることもなく、炎もあなたに燃えつくことがない。わたしはあなたの神、主である。イスラエルの聖者、あなたの救い主である」(イザヤ書43章)

と。

日々ごとに、主様は御自分の子どもたちをお教えになる。日常生活の環境(地震、ゲリラ豪雨、暴風の如き天変地異、病、事故)を通してお教えになる。人生の大危機における勝利か敗北かを決定するのは、毎日の試みに対する、われわれの在り方です。まったく自分に頼らずに、救い主に依り頼み、力を授かるとき、平安のうちに日々あゆむことができます。

また主様は、御自分のこどもたちが、神の摂理によって負わされている一層広い舞台での役割を果たすようにと、わたし達を準備しておられる。平安



安息日とは

2018年8月5日

聖書朗読 マルコ伝2章23節～3章6節

災害とも言われる今年の酷暑の中、聖日集会が行われた。

「人類が地球と調和することせず、欲のままに貪^{むさぼ}るなら、我々はその結果を刈り

取ることになる」(ベティー・イーディー著、「死んで私が体験したこと」88頁)

こうした現象を通して、主は我々人類に、主の黄金律(互いに仕え合う姿)に立ち帰ることを迫っておられるように思えてならない。

我々が主の御心を体現する者として、この世で力強く立派に働き働く者となるには、主から鍛えられ、それを忍耐して乗り越えなければならない。主は愛する者を鍛え、子として受け入れる者を皆、躰^{しづ}けられるから。霊の父は我々の益となるように、御自分の神聖にあずからせる(聖霊によって祝福する)目的で我々を鍛えられる。その結果、鍛え上げられた人々は、義という平和に満ちた実(主との完全な交わり、欠けることなき幸福、真の平和)を結ぶ(ヘブル書12・1～11)。

毎日、必死で生きる我々に必要なのは、魂の安息日・聖日集会である。我々は主にあつて一生懸命働くと同時に、自らの限界を知り謙虚に主の懷に帰り、力を頂くことが必要である。

旧約の時代、安息日は、奴隷状態から解放してくださった主を覚える為、また家畜や労働者を休ませる為に設けられた(出エジプト記20・2、23・12、申命記5・15)。安息日を主の聖日としてこれを尊んで、己が道を行わず、己が楽しみを求めず、空しい言葉を語らないならば、主によつて喜びを得、必要な物が与えられる(イザヤ書58・13～14)。

キリストは、

「安息日は苦勞する人々の為にあるので、人を救う為に働く善行は構わない」

として、自分の義を立て律法主義に陥った人々から憎まれた。主は常に我々の行いの外側でなく内側をご覧になる。その故に、主にある者は世の常識にとられない真眼と自由を得る。主にあつて誠実に生きてなお、自分の欲や立派さ正しさを疑わない人々から憎まれ中傷されるなら、それは主の苦しみに与かっている証拠で、このような霊的戦いの中でも、主は我々の勇気が挫^くかれないよう計り知れない心の平和を与えてくださる。



終末の迫りの中で

2018年8月19日

聖書朗読 ペテロ前書1章(全)

今日の集会に新しい方が3名来られた。このため奥田先生は、初めて参加された方に焦点を当て、ペテロ前書第1章をベースに、福音を受け取る心構えを二つ話された。一つは福音が終末の迫りの中で語られていること、二つ目は福音を聴くにあたって神、キリストの霊の次元(天の次元、絶対次元)をいただく必要があることだった。お話の内容は、これまで集会に連なってきた者にも深い内容であり、福音の原点を語るものだった。

ペテロ前書は、「迫害、苦難の中の望み(終末的希望)」が書かれており、手紙の名あて人が「散りて宿れる者」とあつて、国外居住の寄留ユダヤ人に送られた手紙とのことである。奥田先生は、次のように話された。

「ペテロ前書は試練、苦難の中で終末に近いことを念頭に書かれている。私たちも病氣、憂い、死などの問題を抱えているが、その中にあつても、キリストの十字架の愛により、新生、生ける望み、無条件絶対の力をいただいている。私たちは十字架による碎け、おさな幼児の心をいただき、神、キリストの呼び掛けに方向転換(新生)させていただくしかない。恵みを素直に「ハイ」と受け取り、自分がゼロにされた処にこそ聖霊が入ってください。」

続いて霊の次元のことを話された。人は、神様からの霊(聖霊)をいただき、そこに自分を置かなければ、神の言葉、霊の言葉を理解することができない。コリント前書1章、2章では、パウロが「十字架の言」、

「十字架に釘けられ給いしキリストをのべ伝う」

と言い、

「談話も宣教も智恵の美しき言によらずして、御霊と能力ちからとの証明によりたり」

とある。パウロは、自分の力によらず聖霊の働きに一切を委ねることを宣言しており、私たちもパウロのようにこの身を主キリストに預けて、神の能力にゆだねていきたい。私たちは、この徹底した十字架・聖霊の次元を夏季福音特別集会で深く学びたい。

「人はみな草のごとく、その光栄はみな草の花の如し、草は枯れ、花は落つ。

されど主の御言は永遠に保つなり」(ペテロ前書1・24〜25)
であるから。



キリスト直結の信

2018年9月2日

聖書朗読 ガラテヤ書1章1〜5、11〜17節

今日は夏季特別集会の感謝集会として、数人の方が感想を話されました。共通していることは、奥田先生のキリストへの絶対的な帰依と信頼に対して圧倒されたことです。私自身も、「終末の迫りとキリストの霊性」を主題にして

「あなたにとってキリストはいかなる存在か。」

「主はあなたに何を望んでおられるかを受け取ること、キリストの御心を求めることが信仰の出発点である。」

と語られたことに対し、果たして自分が今までこのような角度からキリストに向き合ってきたかを改めて問い直され、心の中に座禅の警策きようさくを打たれたような気がしました。今日の集会でも、

「本当の信仰とは、終末は近いという迫りの中で、キリストの十字架をしつかりと受け取り、人間中心の考え方から神中心の考え方に変わることに、物事を自分の視点から見るのではなく、神様の視点から見ることに、まず神の国と神の義を求めること（マタイ福音書6章33節）が大切です」

と語られました。

神様の次元から地上のことを見るように視点を変えることによって、この世の出来事に対する見方が変わります。天上に引き上げられて地上を見ると、小さなことは雲散霧消して、何が真実であるか、本当に必要なものは何かが見えてきます。

たとえば地獄のようなところを通らされたとしても、キリストと一緒になら、そこは天国になります。この世の禍幸まがさちがどのようなものであっても、

「キリストと共にいるかぎり何も要りません。それで十分です。」

という讃美歌331番（「主にのみ十字架を」）の心境に達することができます。

神様は、私たちが神様の側に視点を移すことによって、

「私は、あなたの創造主であるから、あなたの人生に最後まで責任を持つ。」

と断言されて、どのような状況にあっても平安と守りを与えることを約束されています。私たちは、真剣に主様を求めて、

「我は道なり、誠まことなり、真理なり、生命いのちなり」

の世界を体験するとともに、主に贖われた者として、愛を持って人に仕え、隣人を愛する人（ガラテヤ書5章13節）へと変貌してゆきたいと願っています。



ガラテヤ書の根本精神

2018年9月9日

聖書朗読 ガラテヤ書5章1〜6、13〜15節

「キリスト・イエスに在りては、割禮を受けるも割禮を受けぬも益なく、ただ愛に由りてはたらく信仰のみ益あり。」（ガラテヤ人への書第5章6節）

異端に惑わされていたガラテヤの人たちに、パウロは、使徒の権威をもって、キリスト様によってすでに与えられている恵みの中に、しっかりと立つように勧めました。

永遠で完全な十字架の愛によって救われた召団員は聖霊様によって満たされ、どんな試練や苦難の中でも、主様を愛し、隣人を愛し、また敵をも愛する人（キリスト様に似た者）へ造り変えられて往きます。またこれは、自分を理想的な信者へ完成していくことではなく、

「我キリストとともに十字架につけられたり。最早われ生くるにあらず、キリスト我が内に在りて生くるなり。」

と告白されるように、自分が死んで、私のうちにキリストが形造られていく、新しい創造です。

パウロがこのように厳粛で積極的な方法でガラテヤ人に警告と勧告を発したのは、人からではなく、天の最高の権威者から使徒として任命を受けた指示によるものであった。パウロは、人に教えられることと、キリスト様から直結で教えられることとの相違を、はっきりと語った。

「人よりに非ず、人に由るにも非ず」

と。

今日の講筵で先生は、現世（世間）には喜びはない。

先生の喜びは、

「JOY (Jesus Overflows You.)」

「イエス様が、私の中に満ち溢れていること」

言い換えると、

「イエス様といっしょにいるところが天国です」

と仰いました。



二つの自由

2018年9月16日

聖書朗読 ガラテヤ書3章1～14節

治療と療養のため、しばらくお顔が見られなかったK姉、N兄が元気に参会された。お二人は次々と握手攻めにあいながら、療養の様子を話され、執り成しの祈りへの感謝を口にされた。証言では、お二人とも晴れ晴れとした表情で、主の御護りと無事の再会の喜びを話された。この証言を受けて奥田先生は、詩篇31篇15節の

「わが時はすべて汝の御手にあり」

を引かれ次のように話された。

「私たちの時、生き様、生命いのちは、すべて主の御護りの中にあり、主の御手が護って離さない。主は十字架上にご自身の生命いのちを棄てる（葬る）ことによって、生来いづれの古い私たちを葬り、新しいいのち（第2の誕生）をくださった。その主様が、キリスト一筋で貫いている人を支え、励まし、護られるのは当然です」

「苦難にあるとき、つらい時、コリント後書11章にあるパウロの苦難を思い起こして欲しい」

と。今日の講筵で先生は、二つの自由につき話された。一つは「束縛からの解放」であって、しがらみ、とらわれからの自由である。この世の人は「自由」をこのようなものと考えている。大切なのは、この「自由」は何のための自由かであり、それは「愛への自由」、「愛をもって人に仕える自由」である。これが「もう一つの自由」である。神の国、天の国に魂が憩う人は、この自由を求め、この自由に生きる。その人は何者にも支配されないが、万人に仕える僕でもある。積極的、行動的で、前進して止まない。先生は、キリストが与えようとしておられるのは、この「愛への自由」であると。更に先生は、自由に関してのパウロの次の言葉を引かれた。

「キリストは、自由を得させん為に、我らを釈き放ちたまへり。されば、堅く立ちて、再び奴隷くびきの轡くびきに繋がるな。」（ガラテヤ書5章1節）

「然れど我等はこの権を用ひざりき。唯キリストの福音に障碍さまたけなきように一切すべてのことを忍ぶなり。」（コリント前書9章12節）

「われ凡ての人に対して自主の者なれど、更に多くの人を得んために、自ら凡ての人の奴隷となれり。」（同章19節）

キリストは、ヨハネ伝8章31～32節で、真の弟子・真の自由人であるために、「我が言に居る」ようにと諭された。私たちも、それを目指して、主に育てていただこう。



御霊の賜う自由

——ガラテヤ書(第3回)——

2018年9月23日

聖書朗読 ガラテヤ書5章1～15節

司会者の証言として職場での辛く苦しい経験の意味を祈りの中で主に伺った際、主は

「本当に主にある者は、この世で如何に損な役回りをさせられるか、そのことを分
からせる為に、お前に今回の体験をさせた」

と答えられたことを話した。サンダー・シングの著作の中にも、

「ある意味で、神に反逆している今の世界は、神に従う者たちを奴隷にしていると
いつていい」

という記述がある。我々は、残念ながら、そのような世に生きていることを知り、覚悟し
なければならぬ。ただ、そのような境遇にあっても、世を憎み世と争うのではなく、主
が担われた十字架のお姿と同じく、世を赦し世を担っていくことで、少しでも世の人をキ
リストに近づけることができる。これは主の聖霊の働きなくしては、人間的な思い・頑張
りでは不可能である。

主ご自身が、生涯を通して十字架を背負われ、本来罪がないのに罪人として処刑された
ことで、その血潮によつて、生まれながらの我々の原罪(神の御心に従い得ない罪・咎・憂い)
は赦され、片付けられ、洗い清められた。主が受肉して十字架道を邁進されたのは、自分
の中にもこの世にも真の生命力も希望も見出せない我々に、真の自由と永遠の生命を与え
る為であった。

奥田先生は、司会者の証言を受けて、パウロの受けた迫害・苦難の数々を引き合いに出
されたり、シベリヤ抑留の日本人クリスチャンの辛抱強さ等を語ってくださった。どんな
困難・試練・迫害も主にすがつておれば、絶対大丈夫であることを語られた。我弱くとも、
主が必ず乗り越える力を与えてくださるに違いない。

主の十字架道は、この世的な幸福は約束していない。まず神の国と神の義(全キリストの
生き方)を求めて行けば、必要な物・助け・能力は全て添えて与えられる。我々はそれで十
分である。本当の幸せ(世が奪うことが出来ない靈魂の平安)は主と共に生きることにある。
この事実を我々は日々体験し、その体験を命がけて世に伝える使命がある。我々は、真の
自由を得る為に召された。その自由を利己的に用いることなく、互いに仕える為に用いる。
近くにいる人を自分のように愛する為に用いる。ただ、元々が神に従い得ない性質を持つ
た利己的な我々であるから、主の御霊を常に原動力としなければ必ず行き詰る。



わが福音

2018年10月7日

聖書朗読 ヨハネ第1の手紙3章1〜3節、4章7〜14節

今日は、パウロ書翰を引きながら「わが福音」と題して講筵されました。

その骨子は、自分にとって「わが福音」とは何かを確立して、それを後世に伝える義務があるということです。そのためには、自分にとってキリストはいかなる方であるかをしっかりと受け取り、キリストと固い絆で結ばれる必要があります。そして、「わが福音」を告白するとは、一人ひとりがキリストに出会ってどのように変化したか、すなわち、暗い闇の中にいた自分が光の満ち溢れた世界に導かれたこと、死の世界から生命の世界に導かれたことをはっきりと証言できるようになることです。

そのことは、キリストを信じたことによつて、これこれの御利益があつた、と述べることではありません。また、自分がこれだけのことをやったので、神様からそれを認めていただき、今の安定した生活を保証されたと述べることもありません。

キリストは、必ずしも、「私に従つたら幸せな生活ができます。」と約束されているのではないことを受け取ってください。むしろ、キリストは、

「我に従ひ来らんとせば、己をすて、日々おのが十字架を負ひて我に従へ。」

(ルカ9章23節)

と厳しいことを突きつけられています。確かに、キリストの御言葉は、表現としては大変厳しいように見えますが、その奥には人間の尺度では計れない絶対的な愛と全ての人を救おうとする御本願があります。これが分かるまでは、真の福音を理解することはできません。このキリストの御言葉の奥に隠された深い真理を受け取ることが、本当の意味での信仰なのです。

主様は、私たちがその御心を理解することができるようにと、聖書の中で

「汝ら心を騒がすな。神を信じ、また我を信ぜよ。」

などの励ましの御言葉をくださっています。聖書を身読することによつて、キリストに出会い、御言葉が生活の土台になり、自分の支えとなるなら、そこから平安と安心が生まれ、どのような事態にあつても、キリストの守りと導きの中にある生活ができるようになります。どうか現象面に現れたことにとらわれずに、キリストが私たちをこの世に送り出した以上は、必ず守り抜くと言われる御言葉に全託して進んでください。

「生くるにも、死ぬるにも、我が身によりてキリストの崇められ給はんことを」

(ピリピ1章20節)

とのキリスト一切の揺るぎなき生き方が私の願いです。



神の義、神の愛

—— ロマ書(1) ——

2018年10月21日

聖書朗読 ロマ書1章1～17節

京都集会では今日からロマ書を学ぶこととなった。ロマ書は新約聖書の書簡の中で最初に置かれており、キリストの福音を述べ伝えるためにとても大事な役割を担っている。ただロマ書は論文のようであり、全部で16章に及んでいて分量も多く、その内容は「神の義」とか「信仰の義」「律法」「罪」など、私たちに馴染みにくい言葉、概念を含んでいる。それゆえ他のパウロ書簡と比べ、やや難解である。しかし、パウロは、キリストの福音のため誰よりも多く働き、多くの苦難を負い、数々の試練を乗り越え、各地の兄弟姉妹に「恋慕」とまで述べて情感あふれる手紙を送った。その手紙は、二千年近い時を超えて古びることなく、現代の私たちの心を打ち、熱い共感を呼び起こさせる。パウロは、

「我等その御名の為にもろもろの国人を信仰に従順ならしめんとて……」(ロマ書1章5節)

として福音の深い道理を私たち聖徒に向けて書いた。したがって学ぶ私たちは心して臨みたい。今日はロマ書第1章の前半部分を学んだ。先生は先ず私たちに、パウロを特別な使徒と思わず、皆さんもパウロと同じ使命をキリストからいただいた者として、パウロの気持ちになつてロマ書を読んでくださいと話された。続いて1章冒頭の、パウロが

「キリスト・イエスの僕、召されて使徒となり、神の福音のために選り別たれたるパウロ」

と書いているのに目を止め、パウロの使徒としての明確な自覚を読み取るとともに、使徒行伝9章にあるパウロの回心記事を深く読んだ。更に中心主題であるロマ書1章16節、17節の御言葉に進んだ。先生は、「義人は信仰によりて生くべし」とある箇所で、「律法による義」と「信仰による義」について話された。この言葉は、ピリピ書3章9節では「律法による己が義」と、「唯キリストを信ずる信仰による義、すなはち信仰に基きて神より賜はる義」とある。律法による義とは、律法の行為を重視し、自分を出発点とし、律法を全うすることによって義とせんとする道である。一方、信仰による義は、ロマ書6章3節以下にあるとおり、キリスト・イエスとともに、その死に合うバプテスマ(十字架されること)を受け、キリスト共に新しき生命に歩むようにされることである。ガラテヤ書2章20節以下を全身で受け取ることであり、律法の行為ではなく、聴きて信ずる道である。したがって、信仰による義を賜った者は、

「己を罪につきては死にたるもの、神につきては、キリスト・イエスに在りて

活きたる者と思うべし」(ロマ書1章11節)

とあるのを「ハイ」と受け取る人である。やはりちょっと難しいが、御霊により、これらの学びを導いていただく。



「律法の行為による義」か「信仰による義」か

—— ロマ書(2) ——

2018年10月28日

聖書朗読 ロマ書2章1-16節

聖日集会の翌日、小池先生が書かれた『靈界の星々 神の幕屋人物詩伝』を読み、弘法大師空海やアッシジのフランチェスコ、賀川豊彦、新島襄等の生き方を学んだ。

洋の東西、宗教・人種に関わりなく、神・キリストは御計画の完成の為に我々を用いられる。天地万物の創造主たるキリストは、我々人類の全てを主の平安の中に招き入れんが為にあらゆる手段を尽くしておられるように見える。

キリストは我々を愛してやまない愛そのものの御方。ただ、主は我々の自由意志を尊重される為、我々の方からお願ひしない限り、主の方からは我々の人生に介入なさらない。その為、人類の悲劇から人々を救う為には、キリストに救われ新生命・真の自由を頂いた者は、主の御愛を身証し隣人に仕えないではいけない。

奥田先生は、集会においても、その後の食事会においても、たくさんのメッセージを伝えてくださった。

神・キリストは、偏り見られないーキリストを知っていようと、いなかろうと、その人の心根と行いが天の法則に従ったものであることが大事である。

広やかな心で世の中を見て、おおよそ真実なこと、おおよそ尊ぶべきこと、おおよそ正しいこと等に関しては、虚心坦懐に認めることが必要。

キリストは、当時の民衆を救いあげる際、その人と同じ気持ちになって奇跡の業をなされた。権威をもって

「汝の罪、赦されたり」

と言えたのは、

「お前の償うべき罪は、私が背負うから、私が十字架で身代わりになるから」

という裏づけがあったから。キリストが我々の身代わりとなって十字架刑をお受けくださらなければ、我々は暗闇の中で死ぬ他なかった。このようにして、キリストは我々に神の愛を示され、愛するとはどういうことかを教えてくださった。



偏り見給ふこと無き神

—— ロマ書(3) ——

2018年11月4日

聖書朗読 ロマ書2章1～16節

「そは神には偏り視給ふこと無ければなり」(ロマ人への書2章11節)

主イエス様は人々が相手にしない捨てられた罪びとであると自他共に認める人々のため来られた。ローマの軍人、遊女、夫が5人いる女、取税人、フェニキアの女などの罪びと達のために来られた。私達の集会在まことのエクレシアかどうかは、このような観点から見なければならぬ。

集会は永遠に問題のあるところである。常に罪びと達が来るからである。未熟な者たちが集まり、事件が起こるところが集会だ。そのような人々を歓迎できる集会、そういう集会在まことのエクレシアで、本当の強者の集まりです。罪びとらを招き、慰め、励まし、彼らを神の子にする講筵を先生は、小さなキリストになつて語られました。

役職が高く、社会的な地位のある人がへりくだつて召団の雑用をする姿は、召団の徳となり、美しい影響を及ぼす。世の中の人々が一番見たがつているのは、争わずに互いに愛し合う姿(在り方)である。

「されど我は汝らに告ぐ、汝らの仇を愛し、汝らを責むる者のために祈れ。これ天にいます汝らの父の子とならん為なり。天の父は、その目を悪しき者のうへにも善き者のうへにも昇らせ、雨を正しき者にも正しからぬ者にも降らせ給ふなり。……さらば汝らの天の父の全きが如く、汝らも全かれ。」(マタイ伝5章)

この世は互いにねたみ、憎しみ、利用しようとするが、召団は利用されてあげるところである。この世は復讐するところであるけれど、召団は、赦すところであり、この世は競争するところであるけれど、召団は、互いに譲るところである。この世は分裂するところであるけれど、召団は、一つになるところです。



キリストの贖罪あがないによる義

—— ロマ書(4) ——

2018年11月11日

聖書朗読 ロマ書3章19～31節

錦秋の美しい行楽日和に、集会場には熱心にキリストを求める兄弟姉妹が集い、先生から「キリストの贖罪あがないによる義」と題するロマ書4回目の御講筵を賜りました。

先生が繰り返して語られたのは、大事なことは「信仰」の有無ではなく、その人の本質が何であるかです、神様はその人の内なる在り方を見ておられる、ということでした。

人は自我があるので、どうしても自分の努力や功績を誇りたくなります。もちろん、信仰を求めて自分を高めようと努力すること、清く正しい信仰を目指すように努力を重ねることも大事なことです。しかし、気をつけなければならないのは、そこには落とし穴もあることです。人は、一生懸命に努力精進しているうちに、次第に自分の「信仰の功績」を誇り、自分の信仰をサムシング(重要なもの、大したもの)と思うようになります。

しかし、本当の信仰は、「信仰という功績」によって神様に受け入れてもらうことではありません。神様に受け入れられるためには、神の前に自分を投げ出し、ひれ伏しの姿になること、神様の御前で心が「砕けているか」どうか問われるのです。すなわち、キリストの十字架による贖いを受け取り、キリストの御前にひれ伏し、キリストの御心に従って歩みたいという気持ちになることが重要なのです。

パウロは、律法を完璧に守ってきた優等生でしたが、キリストに圧倒されてからは「律法による己が義」を棄て(ピリピ3章)、

「我キリストとともに十字架に付けられたり。もはや我生くるにあらず、キリスト我が内にありて生くるなり。」(ガラテヤ書2章20節)

という心境に達しました。パウロは、「自分の立派さ」の故ではなく、ひとえに、キリストが贖ってくださったから神の前に立てる、キリストの贖いによらないと神様の御前には立てない、という「砕け」に徹した在り方を告白しているのです。私たちも、

「主様、有り難うございます、今日も明日もあなたと一緒に居らせてください」

という祈り心を持ってキリストを迎え入れると、次第に変化が生じてきます。暗い閉塞した現実の中にあつて呻吟する時も、病の中にあつて苦しむ時も、主様は、

「私があなたの重荷を全て担うから私に全てを托しなさい、聖霊の光による「正しい導き」と聖霊の力による「力強い護り」を与えるから私を信じて従いなさい」

と励ましてくださいます。この御言葉をしっかりと受け取って、この世のあらゆる困難を乗り越えて雄々しく進みましょう。



愛

2018年11月25日

聖書朗読 コリント前書13章(全)

木々の葉が色づき、秋の気配が日増しに深まってゆく。ちよつと寒い日もあるが、太陽の光が暖かい。もうすぐ12月となる。

今日の聖日集会は、福音書、使徒書簡から、「愛」についての箇所を拾い出し、キリストの愛を学んだ。キリストは、その生涯、御存在、働きが「愛」そのものであり、父なる神と共に今に至るまで働き給う。使徒たちは諸教会あての手紙で、「キリストに顕れし神の愛」、「兄弟姉妹の愛」など、愛に関し多くの御言葉を書き記した。奥田先生は、キリストが如何に私たちを愛されたか、それを皆さんに本当に知って欲しいと話され、「愛」に焦点を当てて御言葉を追って行かれた。以下、印象に残った御言葉を書いてみる。

1、「なんじ心を尽し、精神を尽し、思を尽して主なる汝の神を愛すべし、…
：おのれの如くなんじの隣を愛すべし」(マタイ伝22章37～39節)

先生はこの箇所で、次のように話された。自己中心の肉の思いでは出来ないかもしれない。しかし、ガラテヤ書2章20節を「しかり」と受け取り、主の聖霊の働きに全托する中で、主が、『私がさせてあげるよ』と言つてくださる、と。

2、「それ神はその独子を賜ふほどに世を愛し給へり、すべて彼を信する者の亡びずして、永遠の生命を得んためなり。」(ヨハネ伝3章16節)

3、「主は我らの為に生命を捨てたまへり、之によりて愛といふことを知りたり、我等もまた兄弟のために生命を捨つべきなり。」(ヨハネ第一書3章16節)

4、「愛といふは、我ら神を愛せしにあらず、神われらを愛し、その子を遣して我らの罪のために宥めの供物となし給ひし是なり。」(同4章10節)

2、3、4の御言葉に関し先生は、十字架のキリストを深く語られ、イエス・キリストにおいて神が見えない人は、神も、神の愛も知る事が出来ないとはつきり言われた。その他に、ロマ書8章31～39節、同13章10節、ガラテヤ書5章13～16節も深く読んだ。

パウロは、エペソ書3章16節以下で、

「キリストの愛の広さ・長さ・高さ・深さの如何ばかりなるかを悟り、その測り知るべからざる愛を知ることを得しめ、……」

と書いた。私たちの知るところはまだまだ不十分であるが、神・キリストの愛を本当に知り、愛の御言葉が私たちの血肉となるよう、心して進んで行きたい。

集会後、食事会、月例会を行い、会計報告とクリスマス会の集いに関し協議を行った。



「信仰による義」とは？

—— ロマ書(5) ——

2018年12月2日

聖書朗読 ロマ書5章1～11節

集会の後に、M兄作成のクリスマス集会に関する事業計画書(子どもから大人まで、クリスマスマスの集い)が配布され、企画内容や実施の有無等について召団員にて話し合った。

奥田先生が御国に召された後の一般財団法人京都キリスト召団は、どのように事業を展開していけば、キリストの福音を広く深く世に伝えていけるのだろうか。ずっと以前に先生がその問題提起をされてから、私なりに考え続け、主に祈り続けてきた。その結果が現在のあり方であり、生き方となっている。今の私が主に祈り願うことは、「この身が朽ち果てるまで、存分にお用いください。困っている人、悩み苦しんでいる人、嘆き悲しんでいる人に遣わしてください。福音を、伝えるべき人に確実に伝えさせてください。」ということだ。主は祈りに応えて、きつと必要な能力や助け手を与えてくださると思っている。

我々は、キリストの福音というたすき襷を後世に繋いでいくマラソンランナーのようなもの。福音を携えて、困難な現実を雄々しく走り抜くことが求められている。この主にある苦勞の働きが我々の真の喜び・生命となる。

かつて、O姉から何度か、

「小池先生の福音を受け継ぎ、伝えて行く人が必要なのよ」

と言われ、その言葉に非常な感化力があつた事を思い出す。Y姉の強い思いが現在の集会場を誕生させたとも言える。

企画会議の後も、奥田先生と召団の今後のあり方について話し合った。先生がおられる間は、先生が召団の旗印であるが、先生が召された後は、一般財団法人京都キリスト召団の掲げた理念が旗印となる。この理念に基づき、着実・堅実・誠実な事業計画を話し合つて決定し、実施しなければならない。

小池先生が唱えられた信仰のあり方、

「ご利益にあらず、觀念にあらず、パリサイにあらず、靈的傲慢にあらず」

を我々の共通理解としたい。



降誕節前後

——輝く老人たち——

2018年12月16日

聖書朗読 ルカ福音書1章5～25節

「また聖霊に、主のキリストを見ぬうちは死を見ずと示されたり」（ルカ2章26節）

マリヤは、シメオンの深遠な預言を心に思いめぐらし、自分の腕に抱かれている子供をながめ、感謝のよろこびと輝かしい望みに満たされた。

シメオンの言霊は先生の心にイザヤが預言した言葉を思い起させた。

「エッサイの株から一つの芽が出、その根から一つの若枝が生えて実を結び、

その上に主の霊がとどまる」（イザヤ11章1～2節）

多くの人々（後期高齢者）がこの世で長生きしたいと願う。しかしそれは間違った考えです。私たちがこの世でいのちを延ばして生かされている唯一の理由は、キリスト様を伝えるためです。

私たちは既に救われているので、この世に長く生きるべき理由がない。死ぬほうがもっと良い、天国で待っている家族に会えるからです。しかし、主様が私たちをこの世に残して置かれた理由は、大宣教命令を成就なさるためです。

ところが、この命令は私たちが担うことのできない命令です。

しかし、主イエス様は昇天される時、この命令を行うことができる力をくださると約束されました。

「聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、地のはてまで、わたしの証人となる」（使徒行伝1章8節）

主様は召された者（光輝、高霊者）を通して至上命令を実践されます。病んでいようと健康であろうと、老人であろうと若人であろうと、金持ちであろうと貧乏であろうと、私たちは宣教のために在ります。

毎年、御霊の子供を産みましょう。

